

## 立川市庁舎

正会員 野 沢 正 光 君  
正会員 和 田 直 君

立川市庁舎は建築としての評価軸に加えて、その成立のプロセスにおいても特筆される内容を持つ建築である。設計者の選定にあたっては「市民自治の拠点としての庁舎」のあり方を巡って公開コンペが行われ、2段階方式の1段階目では市民代表者の投票があり、2段階目では候補者は市民に対するワークショップを行い、これらの総合的な評価を経て設計者が選定されている。遡って新庁舎建設に対して市民有志の「市民100人委員会」による要望に始まり、建築本体に加えてそのプロセスもすべて市民に公開し「誰のための庁舎か」というストレートな問いに対する答えを、あらゆる段階で既成の方式にとらわれず構築してきたものが、結果として「立川方式」という建築のプロセスモデルに結実したといえる。これは計画から設計段階にとどまらず施工者の選定方法や発注方式、管理体制、継続的な市民参加など、5年以上にもわたり最終的な建物の完成まで続けられた。

この「立川モデル」がどう建築として実現化されているのかは建物としての評価の大きな軸である。設計者はまず「低層+大空間+吹き抜け」という明快な空間構成のコンセプトでこれに応えている。立川基地跡地の新市街地の都市軸に対して前庭、植栽、雛壇テラス、屋上緑化と連続的庁舎を融和させた外観のあり方は、権威性や象徴性とは異なる新たな庁舎の姿として、市民の側から求められた庁舎のテーマの一つである「周辺町づくりを先導する美しい庁舎」に応えるものである。低層化と大空間により庁舎の機能はシンプルに整理され、市民サービスは1階に集約されており、吹き抜けを介して2層目の専門部署、3層目の議会と一体となった空間の形成は「市民自治の拠点」にふさわしいと考えられる。また外部に開かれた雛壇のテラスに向かって諸会議室が設けられることで、常に街に対して開かれた視点も生み出されている。

この空間を構成する建築技術も卓越していて独創的である。大スパンを実現すると同時に環境負荷の低減を試みて構造体をプレキャストプレストレストコンクリート造とし、それを「経済的合理性に優れたスリムな庁舎」として意匠としても最大限活用している。長寿命化と熱環境の向上としてナイトパーズによる躯体蓄熱も意図しており、全体として極めてインテグレートな建築システムを構成している。

さらに、構造技術としては鉄柱とPC壁によるオリジナリティの高い構造システム、免震構造の採用による耐震性の向上など様々な創意と高い技術が導入されている。

環境技術についても、熱負荷軽減を意図した雛壇テラスや庇に加え、吹き抜けを利用した自然換気システム、複層ガラスの全面採用、屋上緑化、地中熱利用など徹底した対策が施され、結果として高いレベルの環境配慮型の建築を実現している。

以上のように本建物はプロセス、計画、意匠、技術の様々な点で特筆すべき建築であると評価される。

よって、ここに日本建築学会作品選奨を贈るものである。